



隊長 白辺 史郎



隊員 広井 学



隊員 有賀 冬子



特別隊員 ニャン太

馬鹿の稽古②



み教え調査隊とは

いつも耳にするけど、実はよく分からない——そんな「解脱用語」を調査し、教えの理解を深めるべく秘密裏に結成された特別調査チーム。毎回金剛さまの遺されたご指導を読み解き、時に取材に繰り出して、調査した結果を誌面にて報告する。

今月は、利口者から脱皮するための馬鹿の稽古の具体的なポイントを確認します。

前 回は「馬鹿の稽古」を理解するために、金剛さまが「馬鹿」の対比として挙げている「利口」について具体的に考えてみました。

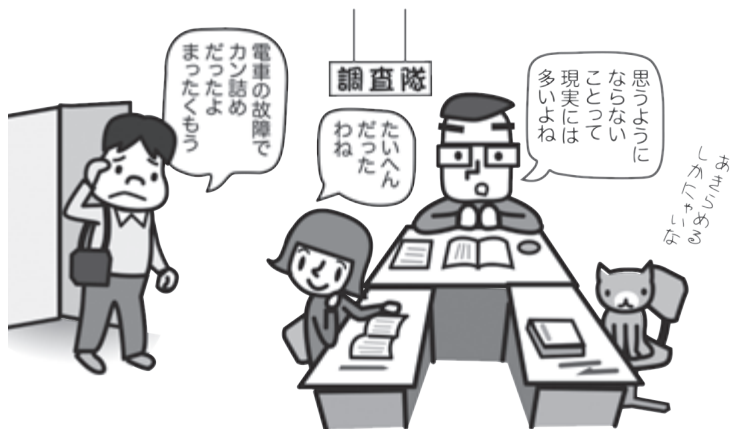
表面を取り繕うことは、一時的に上手くいったように見えてもいずれ行き詰まる——端から見れば分かることなのですが、私たちは、知らず知らずのうちについてしまっています。「胸が痛い……」と調査隊一同、納得とともに反省したのでした。

「こうしたい」という希望を持っていることは主體的に生きるために大切なことで、私たちは「こうすれば、こうなるだろう」と、自分なりの想定をして、希望が叶うように一生懸命努力します。でも、それにこだわると、自分の思い通りの結果にならない時、「こうしているのになぜ……」と不平不満を抱き、他者への怒りや自身を責める苦しみとなって、自分で自分の首を絞めて

しまうんですね。上手くいけばいいけれど、現実には様々な状況が絡んで、思い通りにならないことが多いものです。

金剛さまは、人から言われたことにすぐ反発してしまおうという我の強い会員に対して、「なあ君、日本の国が君の国なら、君の思う通りになるよ。しかしそうではないから、思い通りにはならないよ」『新版解脱金剛伝』第二巻334頁）とおっしゃっています。

「じゃあ、僕たちは、ままならないことに出会った時、利口にならず、ただあきらめて我慢するしかないのか……」と意気消沈する広井隊員。すると紅一点の有賀隊員が、「でも、金剛さまは「馬鹿ほど楽なものはない」(『聖訓』第六巻92頁)とおっしゃられているわ。どうしようことなのかしら」と疑問を投げかけました。



今日からはじめる 馬鹿の稽古



広井学●「馬鹿ほど楽なものはない」のかあ……だとすると、先月の投書にあった「上司に理不尽に怒られた時、我慢するのが馬鹿の稽古なの？」はどう考えたらいいのかな。

有賀冬子●そもそも、その上司の言い分って本当にすべて理不尽なのかしら。虫の居所が悪いときつい物言いをするような上司もいるけど、指摘されたことの中には「これは言われても仕方ないな」と反省する部分

そんなことを言われても「本当にそうなの？」と疑う人もいるかもしれませんが。でも、思い出してみてください。先輩や友人から無茶ぶりをされて、「そんなの無理！」と思いつつもやってみたら、案外うまくいって新しい自分を発見したなんて経験はありませんか。「食わず嫌い」という言葉がありますが、人間は結構、あらゆること「いや」嫌いだがあるのです。だから、試練に直面した時には、それがどんなに望まないものであっても真っ向から受け止めるべきなのです。

こうした時、一番やってはいけないのは「逃げる」こと。利口者は、もっともらしい言い訳を並べて困難から逃げて、せっかくの成長のチャンスをみすみすふいにします。その時は楽でできたと思ってても、後になれば、ちゃんと試練と向き合った人との差は歴然と表れるものです。

もあつたりするじゃない？

広井●もしかしたら最初から「理不尽だ」「耐えるしかない」と決めつけてしまっているのかもね。降りかかった災難と違って、じっと我慢してやり過ぎそうとしているとかさ。

白辺隊長●そうだね。でも、金剛さまは「理不尽だ」「思うままにならないう」というところには意味があるとおっしゃられている。そこに「我慢」ではなく「楽になる」ヒントがあるんじゃないかな。

ままならないから面白い！

「世の中を儘にならぬと癪癪起すのも人間であります、そういう人間の儘になったらこの世の中は滅茶苦茶でありますよ。射撃の名人でも百発百中は容易ではない、而も当たらぬところに又面白味があるのではないか、そこに修練の必要があるからであります。」(『聖訓』第七巻98頁)

物事は必ずうまく行くとは限りません。そこには訓練してレベルアップする努力も必要ですし、努力して上達する喜びもあります。だから「ままならない」のが「面白い」のです。

私たちは困難やトラブルがある時障害やアンラッキーと捉えがちですが、そうしたトラブルなどは自分の力不足に気づかせ、さらに磨き高める機会なのです。なぜなら、こうした「試練」を私たちに与えてくださっているのは他でもない、神様ご先祖さまだからです。

いつも私たちを護り導いてくださる神先祖の御加護とは、単に身の危険から守ってくださるようなものばかりではなく、時にはあえて厳しい試練が差し向けられることもあります。それは、私たちをどんな困難にも折れることのないたくましい人間に育てようという神先祖の計らいがあるからです。

「自分にできるだろうか」と不安に思っても、神先祖は乗り越えられる試練しか与えません。余計なことは考えず、どんなことも勇気を出して挑戦するのが「馬鹿の稽古」です。やってみると苦手と思っていたことが案外楽しかったり、今まで知らなかったことに関心の幅が広がり、その経験はあなたを飛躍的に成長させるでしょう。

そうして初めて、神先祖があなたのために与えた試練だったことが実感できるはずですよ。

広井●なるほど、逃げてはもったいないんだな。

有賀●「我慢だ」って自分の殻に引きこもるのも一種の「逃げ」よね。もし上司の言葉の中に神先祖がその人に「気づいてほしい」勉強があったら、それじゃ受け取れないわ。

広井●きつく叱られて傷ついちゃう



気持ちも分かるんだけどな。「転んでもただじゃ起きないぞー」くらいの心持ちで、そこから一つでも「学ぼう」とする意識で向き合った方が、必ず何か得られると思う。

有賀●私も大賛成！ しかもそれの結果的に自分が成長できれば、その上司のお蔭、たもの。だから金剛さまは「邪魔をしてくれる人、邪見にしてくれる人こそ、自分を高め深めてくれる恩人」(『尊者の贈り物』211頁)



かず、周囲の人からは白い目で見られ、すべてが行き詰まっている……
 そういう人が多いのです。
 そうならないために、いつまでも「自分は半人前」という謙虚な心を胸に刻んでおく必要があります。
 「一銭の人間が、一銭の分際を弁えず、大層偉がって神仏を馬鹿にするのは寧ろおかしい。虚勢を張っても一銭は一銭であります。(中略) 兎角一銭が百円千円の見栄を出すから秩序を紊します。」
 自分は一銭である、十銭の十分の一である、軽い身分であると謙遜すれば、十銭の方が位負けしましょう。こんな立派な一銭が十集まってこそ十銭ではないか。馬鹿になれとはこのことです。馬鹿の一銭がなくては十銭もない、一億円もない、一銭は合計への第一歩であります(『ご聖訓』第七巻13頁)

自分は半人前だから、人の二倍、

とおっしゃられたのね。
 隊長●それに、理不尽な上司の下でも腐らず誠実に働き続けていれば、そうした姿は必ず誰かが見ていて評価してくれるものだしね。一つでも学ぼうとする意識か……これは馬鹿の稽古に挑む姿勢には欠かせないものかもしれないぞ。

未完成な私たち

「常に言う自分は馬鹿である。自程度馬鹿なものはない。だから日々神に直参して、どうか人並みになるように、神のお力で使って頂きたい」といふ心こそ、この謙遜の徳の心その。既に自分の魂の中に神が宿るのであります(『ご聖訓』第五巻66頁)

「自分は馬鹿である」だなんて自分を卑下しているようで嫌だなと感じるかもしれませんが、「馬鹿」を「未熟」と置き換えることでどうでしょうか。「この胸に手を当てて」自分は完璧

な人間だ」と心から思える人はいます。せんよね。そうです、私たちは皆、未熟、さらに言えば「未完成」な存在です。それは別の見方をすれば、誰もが努力次第で向上してゆける可能性があるとということです。このように考えると、晩年の金剛さまが會員たちに「馬鹿の稽古」を繰り返して話されていたのは、馬鹿の稽古を積んで、どこまでも成長してほしいからに違いありません。

人が成長する時に最も大切な姿勢が「謙虚」です。それは「自分は未完成だ」との自覚から生まれます。
 例えば、勤め人であれば新入社員の時を思い出してください。まだ仕事の内容が分からない、未熟な自分ができることを無我夢中に働くことだけです。そこに余計な見栄や損得勘定はありません。「少しでもできるようになりたい」「早く一人前になりたい」と向上心を燃やして、

気持ちちは初心者



(羽ではありませぬ)

他人の言葉にも耳を傾け、ひたすら努力を重ねる中で、気がついたら仕事も少しはできるようになっていたのではないのでしょうか。

しかし、だんだん仕事に慣れてくると、「こんな俺の仕事じゃない」と思い上がったたり、後輩に良い格好を見せようと虚勢を張ったり、余計なことに頭を使いがちになります。表面を取り繕うことは十分に気を取られて、気がつく仕事はうまくい

三倍やらなくてはと思えば、「あんなの上司失格だ」とか「アイツばかり引き立てられてる」といった余計な不平不満は抱きません。それよりも、未熟な自分を支えてくれる先輩や周囲の有り難さがもっと大きく感じられるからです。

このように、未熟な自分を自覚し、そんな自分を支えてくださるすべてに感謝して、与えられた自分の仕事(役目)に精いっぱいお使いいただくことは、まさに馬鹿の稽古です。謙虚さと感謝の心を持って誠心誠意努力するからこそ、私たちは大きく成長することができます。

有賀●私も立派な一銭になりたい！
広井●でも、自分を切りかえるのはそう簡単じゃないよ。いくら頭では「馬鹿が正解」と分かっているとしても毎日の生活ではふと油断したすきに、つい利口に計算しちゃいそう。



『新版解脱金剛伝』第一巻から「馬鹿の稽古」を実践された栗山勝五郎さんの話を紹介します。

酒屋を営む会員の栗山さんは、会う人すべてに天茶の話をするので「あまちゃ」とあだ名を付けられていました。戦時下のこと、同じ町内の枳清酒店の主人が出征となり、二人の子供を抱えた奥さんが途方に暮れていることを知ると、栗山さんはすぐに行動を起こしました。双方の

隊長●そんな時、自分に負けないための魔法の言葉があるよ。ヒントは「毎朝夕にお唱えしている」かな。
広井●もしかして、「ふさわしくお使いください」ですか？

隊長●そのとおり。腹の立つことや逃げたくなることが起きた時は朝の誓いを思い出して、「自分にふさわしく頂いた試練」と思って自分の都合を忘れて取り組めばいいんだ。

広井●そして夕のご挨拶の時にその日で馬鹿になれた場面、なれなかった場面をふり返ってご報告するの。そうすると、日々の暮らしの何もかもが馬鹿の稽古になりますね。

有賀●さらに言えば、試練を「感謝」で受け止められたら本物よね。

隊長●そうさ、神先祖から頂く試練は自分にとって成長の「チャンス」だからね。嫌々でも行えばそれなりの結果は頂けるけど、喜んで行えば結果はより良いものが頂ける。それ

得意先には枳清酒店から買うようにお願いをし、店員もいないので、自らが注文を承り、配達まで引き受けたのです。この評判はまたたく間に広がり、「普通ならこれ幸いと得意先を横取りしてしまうのに」と驚く周囲に栗山さんは、「私が入会する解脱会では助け合つのが当然だと教わりました」と平然と答えたのです。周りの人々は、頭では分かっているにもかかわらず実行できないことを当り前のように行う栗山さんの姿に感動し、その後、彼の導きで多くの人が入会したそうです。

このように世間の評判を気にせず、ただ相手のために思い、無私に努力する姿が「一歩進んだ馬鹿」の姿であり、結果的に枳清酒店は救われ、栗山さんは予想外に周囲からの「信頼」を得るようになりました。損得勘定を忘れ、奉仕の心で人の幸せのために努力すること、あるいはや



が法則というものなんだよ。

有賀●私もそんな実感を覚えたことあります。それに喜んで前向きに取り組むからこそ、乗り越えるための工夫も生まれてきますね。

隊長●「馬鹿になれ、春は際限なく馬鹿の関門にのみ訪れるのだ」(『聖訓 第二巻 51頁』と金剛さまもおっしゃられている。自分の都合を考えず、何事も感謝で行い続けられれば、どんな試練も自分を育む栄養にできるたくましい人間になれるはずだ。

るべき事に全力を注ぐこと。これを持続してゆることが「馬鹿の稽古」であり、それが喜びとなって神仏の心に通じ、結果、自己中心的な自分が改められ魅力的な人になるのです。

「馬鹿の稽古」は誰にでも、どこにいても実行することができます。

例えば、道に迷っている人や体調が悪そうな人、また友人の悩み、それから落ちているゴミも同様です。

迷うことなく声をかけ、耳を傾け、「ゴミを拾う、そうした行いをする」とが「馬鹿の稽古」なのです。

金剛さまは、「努力して要求せず、最高道徳」と説かれています。自分の損得勘定や好き嫌いを忘れて、世のため人のために行動する中に本当の幸せな人生が生まれるのです。

次回七月号は、「貧乏の稽古」について調査していきますので、ご期待ください！